

ヤンゴン素描 17

帝釈天とマングローブ姫の子、オカラパ王の物語

山形洋一



ヤンゴン中央駅の北 11 キロのところ、タダガレーの駅がある。1928-9 年測量の地図にも明記された古い駅で、昭和 17 年（1942 年）版『ビルマ地名要覧』「ラングーン（県）」の項によれば、当時人口 526 人の村だった。

ここは、ヤンゴンの東をくねくね南下するンガモーイェイック・クリークが、もっとも西に寄った地点、すなわちヤンゴン半島の喉首にあたる。駅のすぐ東を南北に走る幹線道路の北東が北オカラパ町、南東が南オカラパ町で、ともに宅地として 1960 年代に開発された。

その東大路に抜ける手前には、中古の家電製品や解体部品が売られている。駅の裏（西）に回れば、屑鉄や非鉄金属の回収店もある。隣接する飯屋では定食の値段が 200 チャット。相場（700 チャット）の 3 割という安値はさすがに恐ろしい。残飯再加熱かと思ったがそのようでもなく、食後に腹を痛くすることもなかった。

この駅の北東にメラムー（Mailamu）という奇妙な寺がある。境内にはブッダの生涯（仏伝）や前世物語（ジャータカ、本生譚）などをテーマに、彩色コンクリート像が立ち並ぶ。

どれも拙い出来だが、僧から俗、親から子へ仏教説話を伝える教材として、けっこう人気があるようだ。

リアリズムで判断するなら、川を背にして腹這う巨大なワニ像が優れている。これを作った仏師はよほどワニの形態に詳しいようで、個々の鱗や歯の形状がじつに正確だ。あんどりとあけた口の奥には仏像が安置され、太い胴は中空で、中にオカラパ王の伝説絵が展示されている。

できれば大潮の満潮時に来てみるとよい。裏のクリークからあふれた泥水が境内を浸し、ぬるぬると苔蒸した大理石の敷石を恐るおそる進むと、大ワニの後から、中ワニ、小ワニが続々上陸してきそうな恐怖に、多少の納涼効果が期待できそうだ。

伝説によればこのワニの名は「ンガモーイェイツ」。クリークの主にして、帝釈天のご落胤（らくいん）。オカラパ王にとっては「異母兄」にあたる。

寺の名「メ・ラムー」はオカラパ王の生母の呼び名で、「メ」は女、「ラムー」はマングローブ植物の一種、つまり汽水域のかぐや姫なのだ。このクリークで修行中の行者が、マングローブ林で大きな種子を見つけ、持ちかえると、中から女の子が生まれた。「メラムー」（マングローブ姫）と名付けられた女兒は、やがて美しい娘に育ち、その美貌が天上の軍神インドラ（帝釈天）の目にとまる。二人は相思相愛の仲となり、帝釈天は正式に求婚するための準備に一旦天上界に戻るが、それを知った天上界の4人の妃が一丸となり、帝釈天の記憶を消してしまう。

そうとは知らず地上で待ち焦がれるメラムーの憔悴を見かねた行者は、オウムに手紙を持たせて天上界に送る。帝釈天はその手紙でメラムーとの約束を思い出し、返信がわりの聖水（精液）をオウムに託す。それを知った4人の王妃は、トビ（鳶）を放ち、帰りを急ぐオウムを襲わせる。オウムはトビの攻撃を三度かわすが、そのたびに聖水がすこしずつこぼれてしまった。それを地上で受けたのは、メスのゾウ、メスのシカ、メスのワニだった。三匹のメスはそれぞれ懐妊し、やがて生まれたのが、六牙（ろくげ）象・シャダanta、半鹿半人・ミンガラドン、そしてワニのンガモーイェイツである。

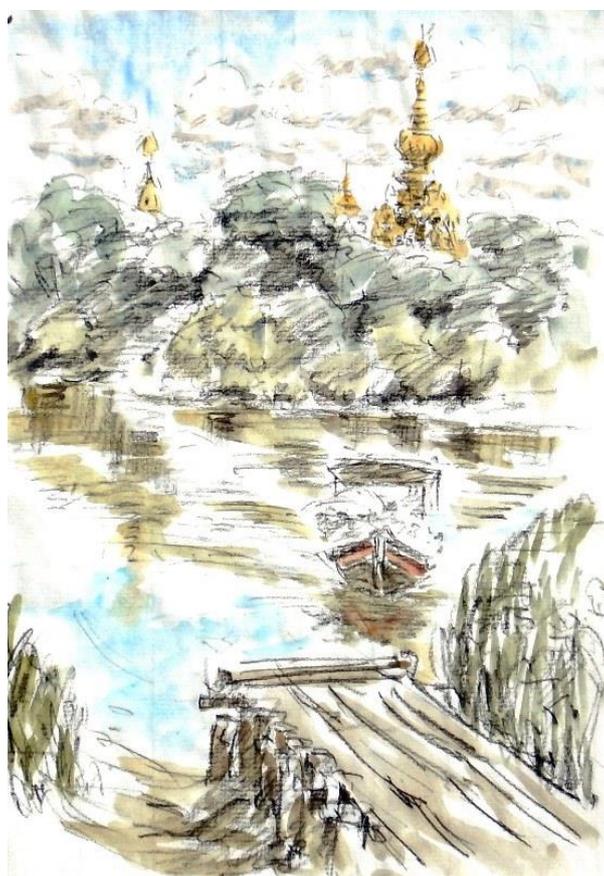
トビの攻撃からようやく逃れたオウムは、聖水の一滴を何とか持ちかえる。それを飲んだメラムーもやがて懐妊して男の子を生むが、これが成長してオカラパ王となる。同じ聖水から生まれたミンガラドンとンガモーイェイツは、異母弟オカラパ王に謁見して家臣となるが、シャダanta（六牙）象は山伝いにヒマラヤへ去った。

オカラパ王は佛教護法のためにこの世に生を受けたのだ。兄弟の商人タプッサとバツリカがはるばる中部インドから将来したブツダの聖髪をシュエダゴンの丘に安置することが、彼の使命だった。聖髪を最初に拝んだ場所にはボタタウン・パゴダが建てられ、ともに埋葬すべき三過去仏の聖遺物の在りか審議した場所にはスーレ・パゴダが建てられた。

ところで「マングローブ」とは、熱帯・亜熱帯の河口汽水域の塩性湿原に生える植物の総称だが、そのうち「ラムー」について北京大学発行『緬漢詞典』では「美国紅樹 *Rhizophora Mingle*」としている。つまりヤエヤマヒルギの一種ということになるのだが、ワニ像の背

に刻まれ、シュエダゴン縁起絵本（下記参考資料）にも描かれたカキの実形の種子から判断するに、ハマザクロ *Sonneratia alba* が最も近い。スワヒリ語で *Mpya*（独楽の木）と呼ばれるとおり球形（擬宝珠形）で、中で育つ胎児にとってはヤエヤマヒルギ内の肩身の狭さより、だいぶ居心地がよさそうだ。

シュエダゴンはヒマラヤ山脈の末端にあたり、その脇腹に大鱈川が食い込んだところがタダガレー。身近な風景に雄大な神話世界を投影できた古代人に敬意を表しつつ、クリークに面した茶店で干満の様子でも眺めることにしよう。流れが変わるにしたがい、渡し船の往復航路もすこしずつ変化する。対岸へは往復 100 チャット。インド風の金色仏塔が日の光を受けて蠱惑的だ。舟着き場脇の木の枝からぶら下がる焦げ茶色の風呂敷包みは、すべて生きたオオコウモリである。



参考文献：Myint Moh May May Literature 編 “Shwe Dagon Phayar Thamain”（緬英対訳のシュエダゴン仏塔縁起絵本。英文題 “The History of Shwe Dagon Pagoda”, 2014), Yangon。

（了）